

➤ 日月神示、マカバ、フラワーオブライフ

宇宙の最終形態 「神聖幾何学」のすべて

02

[二の流れ]

生命の営み、自然の営み、すべてを生み出し、すべてを動かす

【元一つのエネルギー】の解説書

原子のその先の粒と波は「神聖幾何学」のらせん運動そのものであった

トッチ + 磯 正仁

tocchi

masahito iso



日月神示、マカバ、
フラワーオブライフ

宇宙の最終形態
「神聖幾何学」のすべて



[三の流れ]

まちあわせは、次の次元にしましょう。

日月神示、マカバ、フラワーオブライフ

宇宙の最終形態「神聖幾何学」のすべて3 「三の流れ」 目次

第1章 立体意識に入るために今、必要なこと

平面から立体へ・有限から無限へ 010

春分も立体で捉えることにより多次元化する 014

今、起きているのは宇宙レベルの衣替え 018

奥行きを思い出すための手放し、ずらし 020

「ひふみでまつれ」とは 025

日月神示と先住民族の長老が伝える共通のメッセージ 032

水は青という認識でいいのか？ 034

プラトン立体Ⅱ一霊四魂 036

漢字の呪詛から抜ける 041

本物の叡智・真理に出合ったとき 043

紙遊び・神遊び 048

「照れ」こそが、まわりを照らす「アマテラス」 050

人間は水と電気の中に生きている 055

自分と向き合う「恥ずかし固め」 058

立体を知ることの意味、知らないことで生まれる差 065

少数精鋭で——より少ない方にエネルギーは集まる 068

見方が変われば味方が変わる 074

第2章 立体を作ることめで覚醒びめる意識

すべては麻の葉模様の話 078

黄金比と大和比が織りなす立体フラワーオブライフ 083

平面になると奥行きが変わる 088

神にまつろうことの真意 090

隠された数字から見えてくるもの 092

法則性の中にある神の御縁 102

学校で習ったのは本当のことなのか? 107

意識をひっくり返すための型出しⅡ立体づくり 110

人間は一つひとつの幾何学のエネルギー 113

第3章 参加者からの質問

平面を本物としてデザインした時代 118

奇跡の設計図を行動で外の世界に投射する 124

魂のインターネットを構築する 1
2
7

参考文献・引用 1
3
2

本書は、2018年3月20日（火）にヒカルランドで行われたセミナー『日月神示、マカバ、フラワーオブライフ 宇宙の最終形態「神聖幾何学」のすべて』12回連続講座 第3回（講師…トッチ・特別講師…磯正仁）をもとに、構成・編集したものです。

第1章

立体意識に入るために
今、必要なこと

平面から立体へ・有限から無限へ

磯 正仁 今日には12回シリーズセミナーの第3回ですね。

第1回と第2回では「たった一つにして永遠不変なる真理」とは何か。日月神示の伝える「古いにしえの元もとツ神つかみ」こそが、たった一つにして永遠不変なる宇宙の真理・法則性のことを示しており、立体フラワーオブライフ（神聖幾何学）は、その真理・法則性を形であらわしたものの、真理と共振するための形かた霊だまであり、鍵であること。また、古神道が伝承してきた叡えい智ちの中は、この真理を受け取るためのヒントであふれていたというお話をしました。

今、この大きな変容の時代に、わたしたちが不変なる真理を改めて受け取り直し、宇宙の法則性へと帰還していくために、日月神示が導いてくれているように、

これまでの平面意識から卒業して立体意識へと進んでいくことが不可欠となります。

本日は、3回目の集い。

「3」という数字は、見える世界と見えない世界をつなぐ、すなわち平面世界と立体世界との懸け橋となっている数霊かずだまです。長らくわたしたちは、平面意識に基づいて、善か悪か、光か影か、左か右かというように、二者択一の世界を生きてきました。自らの価値観と合わない判断したものを裁きさば、遠ざけようとする無意識の習性の中にいたわけです。この習性、脳のパターンは、同じ立体を一つの角度から見て、違う角度から見た平面的な形を違うものとして捉え、排他や競争に結びつけてしまうという危うさをはらんでいました。

この意識を変容・立体化させていったとき、同じ立体を見ているのにもかかわらず、違うものと認識し、どちらの見方が正しいかを必死に争っていた自分がいたこと、その争いや裁きに、これまで人生の多くの時間とエネルギーを使っていたこと

に気づかされ、あぜんとしてしまいます。

よく考えると本当におかしなことなのですが、この世界はすべてが立体でできていて、平面のものなど何一つないのに、わたしたちは、いつの間にかすべてを平面で捉えることが当たり前になってしまいました。ものごとを一つの角度からだけ見て、奥行きがあること、側面があることを忘れてしまった。だから、本当は「4」（四面体）であるものを、その奥の一点を見出せずに「3」（三角形）であると捉えていたわけです。

立体を一つの角度からだけ見て、平面として捉える固定化した見方によって、「決めつけ（思いこみ）」という感覚が生じることは当然ですね。そして、その「決めつけ（思いこみ）」から、評価・対立・競争が生まれ、いかに「奪い合うか」という世界に、自分たちを閉じこめてきてしまったのです。さらに「奪い合い」によって、本来は無限であるものを、有限であると勘違いするようになります。

意識の立体化は、見えない世界、見えないと錯覚していた領域を見出していくこ

とでもあります。無意識を意識化していくプロセスを経て、見えない世界を観^{かん}じることのできる自分を育^{はぐく}んでいく。見えないと思^{おも}いこんでいる世界、自らの死角^{しかく}を認識するためには、視点を^{しつてん}変える必要があります。すなわち、自^{みづか}らの意識を^しずらすことが大切です。

これまでのこだわり、常識、自分を呪縛^{じゆばく}しているルールや過去への執着。これらと勇気をもって向き合いながら受容し、溶かしていく。思いこみを基に、無意識が映し出している人生から卒業したとき、見えない領域を意識することができるようになってきます。何も^なないと思^{おも}いこんでいた世界にすべてがそろっていたことを理解し、行動へとつなげていく道に立つわけです。

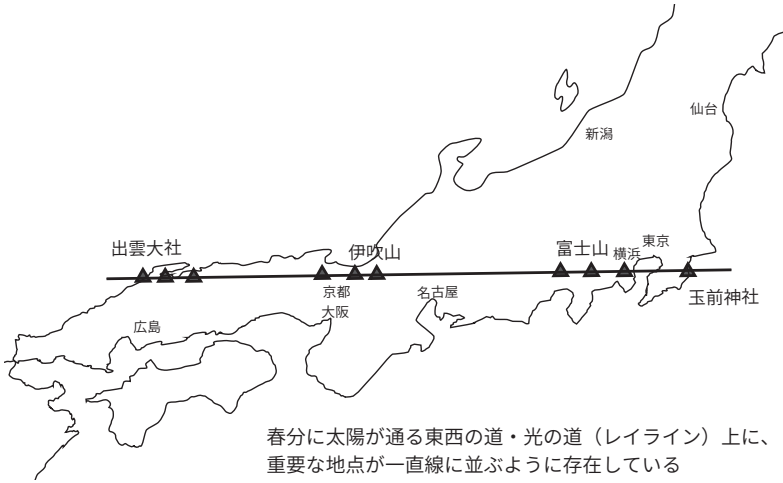
有限から無限への道を行く。このとき、自^{みづか}らが意識的に創造する人生を、神人^{かみびと}として歩み出すことになりました。生かされてきた人生と、自^{みづか}らを生きる人生の統合です。有限だと思^{おも}いこんでいたものが、実は無限であったことを思い出せば、わたしたちはもう「奪^{うば}い合い」をする必要はなくなるのです。

春分も立体で捉えることにより多次元化する

磯 明日は2018年の春分ですね。この春分というのも、平面で捉えるか、立体で捉えるかには大きな違いがあります。

春分には太陽が真東から上って真西に沈んでいきます。日本において、太陽の通る東西の道が光の道（レイライン）と呼ばれ、このライン上に、大切な神社が一直線に並ぶことでも有名です。

例えば、千葉の玉前神社たまさきを東の筆頭に、富士山頂、もう少し西に行くと伊吹山いぶきという霊山、そして元伊勢・内宮、さらに出雲大社が、東西のライン上に一直線に並んでいます。春分の日には、このライン上を太陽が弧を描きながら通過していくわけです。



春分に太陽が通る東西の道・光の道（レイライン）上に、重要な地点が一直線に並ぶように存在している

大切な神社が並んでいるラインを意識して、春分の日に祈りを捧げる。例えば玉前神社に立ち、出雲大社のご神体に意識を向けて太陽に感謝しながら祈りを捧げる。そこにはすでに「奥行き」を観^みじ取る立体的な視点・意識が存在しているのです。

さらに宇宙の法則の下では、必ず目に見えない世界（意識・想念・エネルギーの世界）が先に動きだし、その後一定のタイムラグをおいて、目に見える世界（現象界）において、具象化が起きます。この視点から春分を捉えると、春分という一点が、目の前に具象化するまでに、冬から春にかけて

立体意識に入るために今、必要なこと

てのエネルギーが多様多層に混在しながら生み出されたことに気がつきます。太陽が冬至から徐々に日照時間を長くし、角度をつけながら立ち上がってくる。冬のエネルギーが春のエネルギーへと移ろっていく、グラデーションの世界。今年の春分は、どのあたりから、春の気が冬の気を上回ってやってきたのか？ その移ろいに自然界の生命いのちは、この星の四元素は、どのような変容を重ねたのか？ 自らの感覚で自然界の移ろいを感じながら、春分という節目を迎えると、その日が大切な節目の一日でありながらも、すべての生命いのちの移ろいが重なった、特別でもあり、特別ではない一点であることに気づかされます。

受け取り方によって、春分も多次元化していくわけですね。

そして、さらに立体的な視点を広げていくと、地球と太陽系、銀河、宇宙の関係でいうならば、わたしたちの太陽系は平面で回っているわけではなく、宇宙のある一点に向けて、らせん回転をしながら高速に進行しており、その軌跡は立体です。運行速度は、秒速およそ20キロともいわれており、これが現在にもあてはまると仮

定すれば、秒速20キロ×3600秒×24時間×365日分、一年前の春分とは、およそ6億3000万キロ離れた宇宙空間で、今年の春分が成立していることとなります。宇宙空間において、わたしたちの立ち位置は常に高速でずれているのですね。

位置がずれることで、周波数が変わります。新たな周波数に対応すべく、地球でもこれまで周期的に、例えば2万6000年ごとに、大きな衣替えがさまざまな形であらわれて、今日の地球へと至っています。もちろんわたしたち人類をはじめ、この星に生存するすべての生命も、そういった地球の衣替えに合わせて、あらゆる形で変容を繰り返してきたわけです。

今、起きているのは宇宙レベルの衣替え

磯 ある覚者は「このたびの衣替えは、地球レベルで起こるものではなく、太陽系を超え、銀河系を超えて宇宙レベルで起こる衣替えであり、地球誕生以来、およそ46億年の歴史の中で、はじめて起こる大変容となるだろう。大切なことは、この大変容が終末に向けて起こるのではなく、わたしたちの魂が待望した新たな意識、時代に向けた始まりを意図するものであることを、覚えておく必要がある」と伝えていきます。

日月神示においても「この度の立て替え、立て直しは、これまでにないものとなる。魂の岩戸開きであるぞ」ということが示されています。

さらにもう一人の覚者は「2012年冬至を経て、見えない世界が統合の時代へと舵^{かじ}を切った後、いよいよそのエネルギーが見える世界（現象界）に具象化してく

るのが、この2018年の春分を入口にして、2018年夏至以降、本格化して「と語っています。

それでは、この宇宙レベルの衣替えのタイミングに直面して、わたしたち自身に、いったいどのような変容が求められているのでしょうか？

宇宙レベルの変容・衣替えには、宇宙レベルの叡智えいちをもって対応していく必要がある。レムリア、アトランティスといった古代文明の叡智えいちや、ニビル、プレアデス、シリウスといった、進化した惑星意識が紡つむいできた叡智。これらにも当てはめながら、今回の衣替えには、さらに根源的な宇宙の真理・叡智が求められるわけです。なぜならこのたびは、彼らの星も同時に、我々同様、衣替えを求められているからです。あらゆる意識体が、それぞれに宇宙の中心、自らの中心に宿る真理へと近づいていく、新たな時代に向けてのユニバーサルイニシエーション（宇宙的通過儀礼）。このタイミングでわたしたちの前に現れた宇宙の真理かただまの形霊、立体フラワ―オブライフ。この形霊の叡智、神聖なる性質、それが放つ周波数を深く理解し、

何よりも、その形霊がわたしたち一人ひとりの内にも存在していることを思い出す必要があります。その上で、再びその真理を発動させるにふさわしい意識へと戻っていく。

奥行きを思い出すための手放し、ずらし

礫 宇宙の法則性に基づけば、はじめの動きは中心から、そして見えない世界から。すなわち、自らの意識を真理に向けて変容させていくことからすべてが始まっています。それはまさに、平面から立体への意識改革、奥行きと側面のある世界を思い出していくということでもあるのです。

では、「奥行き」を思い出すとは、具体的にはどういうことなのでしょう？

古神道の教えの中に、奥口おくぐちという言葉があります。目の前にある食べ物や人の御縁ごえんが、たった今に生じたのではなく、例えば、その食べ物が目の前にやってくる

までに描いたキセキ（軌跡・奇跡）、そして、その食べ物が自分の目の前にあらわれるまでに関わった人々のキセキ、さらに、自分がその食べ物と出会うことになったキセキ、いろいろなキセキが重なりあって今、目の前にある食べ物が存在する。つまり、今、の中に、実に多種多様な生命いのちの時間が含まれているということ、そのような、時間の奥行き・エネルギーの奥行きを見出すことができる感性によって、わたしたちは「何もない（と思っていた）ところにすべてがそろっていた」ことを思い出す方向へと導かれるのだと思います。

この無限を悟るプロセスの中で、足りない（と思いこんでいた）ものを必死で得ようとしたり、何者かになろうとする、何者かを演じるという生き方の呪縛じゆばくから、自分自身が解放されていきます。あるがままの自分、今ある状態の中に、すべてそろっていることを見出せる力と一体になったときに、そのような自分の存在が、今ここにあること、それを生み出してくれている、すべての関係性や生命いのちの存在に感謝できるようなのです。

では、この奥口・奥行きを体感するために、わたしたちは具体的に何をすればよいのでしょうか。

まずは、これまで自分が大切だと信じて疑わなかった、価値観・信念・考え方の一式を手放していくというチャレンジをすることです。「欠けている（と思いきんできた）ものを得ようとする生き方」から、「手放しながら、すべてがそろっていったことを悟る生き方」を選択していくことです。

平面的な意識からは、手放すという苦しみを伴うイメージがありますが、著名な科学者が発見に至ったように「これまで何もないと思っていた空間は、実は濃密な高周波エネルギー（愛というのかもしれない）であふれていたのである。それは言いかえれば神聖幾何学の見えない波であり、その周波数と同期したとき、すべての生命が響き合っていることを知るだろう」という発想の転換に至れば、手放す行為ですら、ごく自然のこととして、変化を楽しみながら進んでいけるのかもしれない。いったん手放す勇氣を持てば、必要なものは純粹さを増して再び戻ってくるわけですし、手放したことによってできたスペースに、新たなエネルギーが入って

くる可能性が高いわけですが。

そして、綿棒を使って自らの手で立体フラワーオブライフを作ること、細胞レベル、無意識層レベルにまで神聖幾何学の波動をインストールしていき、「無の中に有が存在する」ことへの、直観的な理解がますます加速するのだと感じます。

価値観・信念・考え方を手放すということとは、表現を変えると、「ずらす」ということでもあります。死角を見られるような意識と、位置のズレをつくるということ、ずらさないと立体の世界には入っていけないのですね。

では「ずらす」ためにはどうしたらよいのでしょうか。

見えている世界（具象化している現実）の裏側には、見えない世界が先に動き始めているという宇宙の法則からいうと、今までの視点をずらして、見えない世界に意識を置いていくということ。一番有力なのは、日常の人間関係の中でその練習をすることです。例えば、自分の考えや意見を通そうとする方向性から、目の前の人を活かしながら、その人のシン（神なる部分）を見出す、という奥口を養うことで

もありません。目の前の存在の中にシン（芯・神・真）を見出す眼力こそが、奥口なのです。

自分の考えや今までの見方を主張する前に、まずは相手のシン（芯・神・真）を見出すことに意識を傾けてみる。目の前の相手を照らして、活かすエネルギーを発しつつ、結果を手放しながら、状況がどのように変容していくかを、洞察しながら行動を重ねていく。それは、日月神示のいう「抱き参らせる」道に通じるものがあるかもしれません。

人はみな、愛されたいと思っています。でも、立体神聖幾何学への理解が深まってくると、実体（見えるエネルギー）が一方方向に動くとき、空間（見えないエネルギー）が反対の方向に動くことに気づかれます。自分は人を変えられないという法則から考えると、まずは自分が「意識（想念）」という見えない世界で空間を動かします。相手に行動を求めるのではなく、自分が先に相手愛する。愛するというのは、相手の中にシン（芯・神・真）を見出すということです。

そうすると、相手から実のエネルギー（行動）が戻ってくるのですね。つまり、自分から見えないエネルギーをポジティブに放つと、相手から直接、または循環を経て、間接的にエネルギーが増幅して、見える形で戻ってくるという仕組みになっています。このとき、エゴができるだけのっていない、純度の高いポジティブな意識を発することが求められます。

これからの時代は、潜在意識レベルも含め、自分のことだけを考えて実を引っ張ろうとすると、意識の重さを伴って、どんどん苦しい虚の世界にはまりこんでいってしまうスピードも加速してくると思います。

「ひふみでまっれ」とは

礫 宇宙レベルの叡智と触れ合うために、すなわち、立体の世界へと意識を高めて

いくためには、先人が残してくれた、真理に関する霊的書物を読んでみるのもおもしろいです。それらは、高次の意識とのコンタクトを重ねながら、もしくは、高次から入ってきた情報やエネルギーを基に執筆されたものです。もちろん日月神示もその一つです。

ただ、日月神示同様、霊的書物は、わたしたちが今の平面意識のまま読みこんでいくと、そこに書いてある真髄にまで達することは、なかなか難しいと思います。

では、どうしたらいいのか？

このときに鍵となるのは、まさに、この立体フラワーオブライフの形かただま霊であり、これが有するところのエネルギーです。実際に立体を作りながら、そして作ることで起きる、意識の立体化を促すような日常の出来事に向き合いつつ、これらの書物を読むことで、今までの平面意識で捉えていたときには理解できなかった部分を、理解できるようになっている、自分自身との出会いが始まります。立体フラワーオブライフが、霊的書物を解説する鍵にもなっているわけですね。

日月神示には「神籬磐境一二三ひもろぎ いわまが ひふみで祀れ」という言葉があります。

「神籬磐境」というのは、簡単にいえば、古代祭祀場や山奥などに見られる神の憑より代しろとなる磐座いわくらのことです。

元来、熊野や古き祭祀場、聖地といわれるような場所は、隕石を神として祀るといふ風習があって、そのことを「速玉信仰はやたま」と呼びます。ものすごいスピードで火の玉が宇宙から降ってくるときの様子を捉えて、そう呼ばれているのだと思います。

隕石が大地に落ちたところは「天地合体点」といって、そこには宇宙の周波数が宿ります。その周波数に合った生物、生命が息吹いぶくようになるのです。宇宙の響きを持った生態系はぐくが育まれ、古いにしえより聖地・神籬磐境として祀られてきたということです。

磐座を祀るといふのは、磐座そのものが、自然界の光や風など四元素と感応しながら、そこに宇宙創成の仕組みがあらわれるからなのです。

例えば、熊野の磐座は、太陽光線が当たっていると、いないところが同時

に生まれる場所にあります。すると温度の差ができるわけです。温度の差ができる
と、風が吹きはじめ、風が吹きはじめると、苔こけなど、土のエレメントがつきはじめ
て、同時に水が生まれます。

水が生まれた瞬間に、磐座のまわりを静電気が囲むんですね。その静電気で囲ま
れた中心に、真空のエリアができて、プラズマがスパークします。神なり雷です
ね。生命創成のシステムを顕現している。まさに宇宙の法則性が磐座に転写してい
る、ということなのです。宇宙創成の仕組みを持った大自然を、ひふみで祀れ
よ、と。

ひふみというのは、ひふみの祝詞のりと（31ページ参照）のことです。日月神示の中
で、いくたびか登場する言霊ことだまで、とても大切だとされている祝詞です。このひふみ
祝詞を宣のたまうことがとても大切なことだ、と。一日最低3回は宣のたまってくださいますよ、と
いうことが日月神示に書かれています。

このひふみの祝詞というのは、遠き昔、古いにしえの神官が、宇宙創成の仕組みそのもの
を言霊にした響きだと理解し、大切な神事の折に、奏上したと伝えられています。

元来、日本の古社では、毎朝、このひふみ祝詞を宣るところから、御社の一日が始まったそうです。

このひふみ祝詞に関して、日月神示は「㊦神の働きがひふみである。神も人も、共にひふみを唱えて岩戸を開けるのだ」と示しています。

ひふみの祝詞は、日本語の清音47文字十ん（これは発音しない）から構成されている言霊です。

宇宙創成のシステムそのものを音霊おとたまにしたひふみ祝詞。

ひふみの「ひ」は火（正四面体）、そして「ふ」は風（正八面体）、「み」は土（正六面体）と水（正二十面体）を指しています（37ページ参照）。同時に「ひふみよいむなやこともちろ（一二三四五六七八九十百千万）」というふうに、エネルギーが無限に広がっていく様子も言霊にあらわれています。

そして一番大事なのは、最後の「あせゑほれけ」。この6文字の示すところが、まさに「あ祖そに帰きいっ一する」ということ、あ祖への帰一、すなわち宇宙の法則性に戻って、一つになるという意味なのです。

わたしたちは、宇宙の永遠にして不変なる唯一の仕組みの中にいて、わたしたちの外にあるすべての生命も、わたしたちの内側にある細胞の一つですら、神聖幾何学の波の循環でできている、と。その大いなるシステム、根源へと再び戻って、元は一つであった喜びを、個として表現し合いましょうということですね。

言霊は、非常に大切なもので、見えない世界と見える世界をつないでいるのが言霊の響きであり、わたしたちの内なる意識と、外の世界との懸け橋になっています。そのつなぐものとして、はじめにあらわれてくるのが言霊です。

汚い言霊を使えば汚い現象が具象化する。自らの内を整え、美しい言霊を放つこととの大切さを、日月神示は重ねて示してくれています。美しい言霊の代表が、このひふみの祝詞だということですね。

この祝詞を奏上するときに、わたしたちの内なる宇宙創成のシステムを発動させて言霊を発する意識が大切です。自らの、内と外にある真理を共振させようとする意識です。

ひふみ よいむなや こともちろらね しきる ゆゑつわぬ

そをたはくめか うおえ にさりへて のますあせゑほれけ

ひふみ祝詞